

水沢城下町地図

歴史ある建物がまちの随所に残る

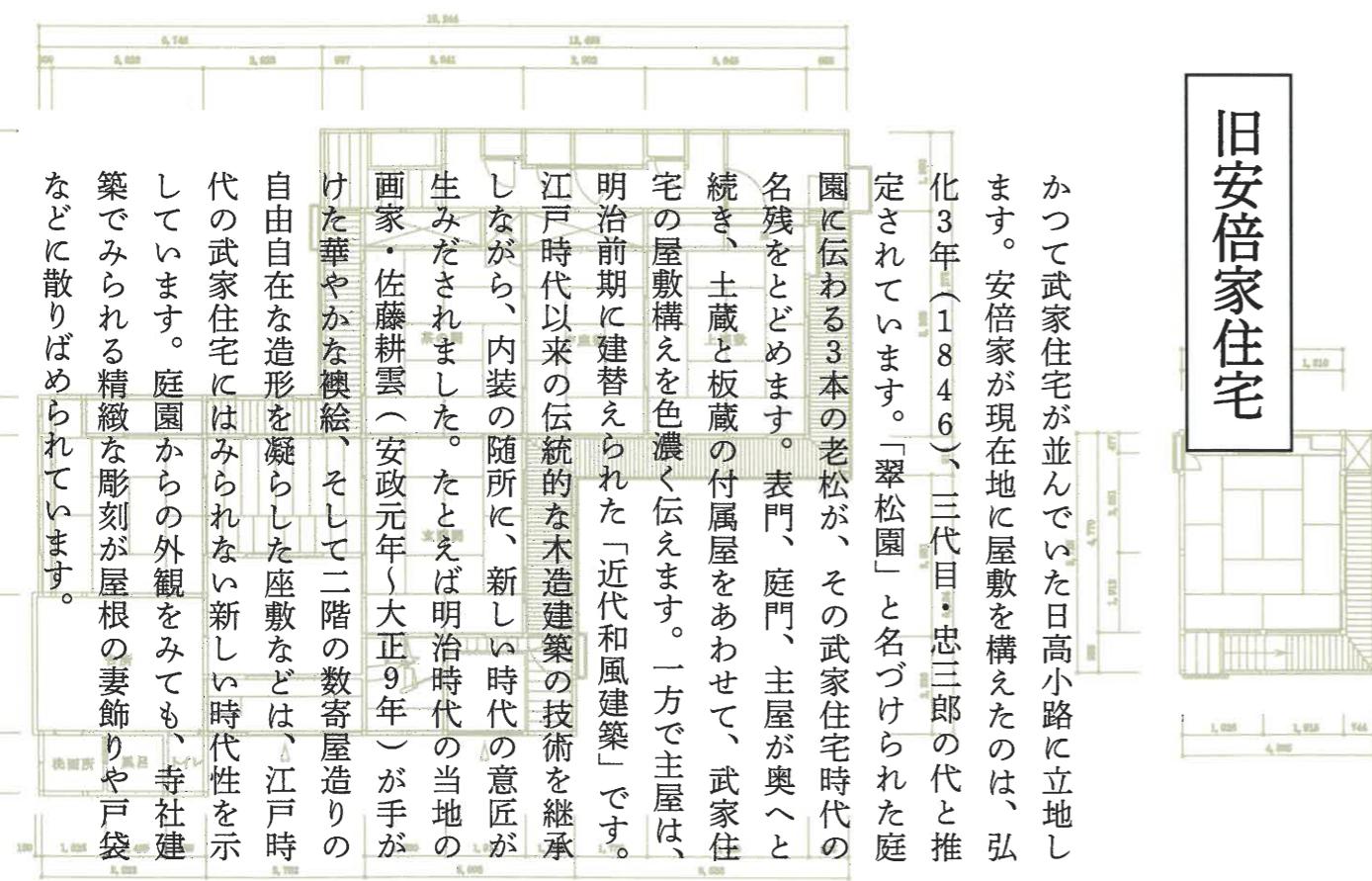


旧安倍家住宅

近代和風建築



旧安倍家住宅



かつて武家住宅が並んでいた日高小路に立地します。安倍家が現在地に屋敷を構えたのは、弘化3年（1846年）、二代目・忠三郎の代と推定されています。「翠松園」と名づけられた庭園に伝わる3本の老松が、その武家住宅時代の名残をとどめます。表門、庭門、主屋が奥へと続き、土蔵と板蔵の付属屋をあわせて、武家住宅の屋敷構えを色濃く伝えます。一方で主屋は、明治前期に建替えられた「近代和風建築」です。江戸時代以来の伝統的な木造建築の技術を継承しながら、内装の随所に、新しい時代の意匠が生みだされました。たとえば明治時代の当地の画家・佐藤耕雲（安政元年～大正9年）が手がけた華やかな襖絵、そして二階の数寄屋造りの自由自在な造形を凝らした座敷などは、江戸時代の武家住宅にはみられない新しい時代性を示しています。庭園からの外観をみて、寺社建築でみられる精緻な彫刻が屋根の妻飾りや戸袋などに散りばめられています。



旧安倍家のみどころ

庭園と主屋の外観

二階建て部分は軽快な寄棟造り、平屋建ての座敷部分は寺社のように入母屋造りと屋根の形式を違えて、庭園から住宅を眺めたときに、対比的な外観を呈しています。仔細にみると戸袋にさえ彫刻が施されています。



茶の間の壁には金物意匠を凝らした簞笥・神棚が埋め込まれています。この左手に平書院を設けており、杉皮付き丸太の中敷居とあわせて、床をもつ座敷風の茶の間としています。



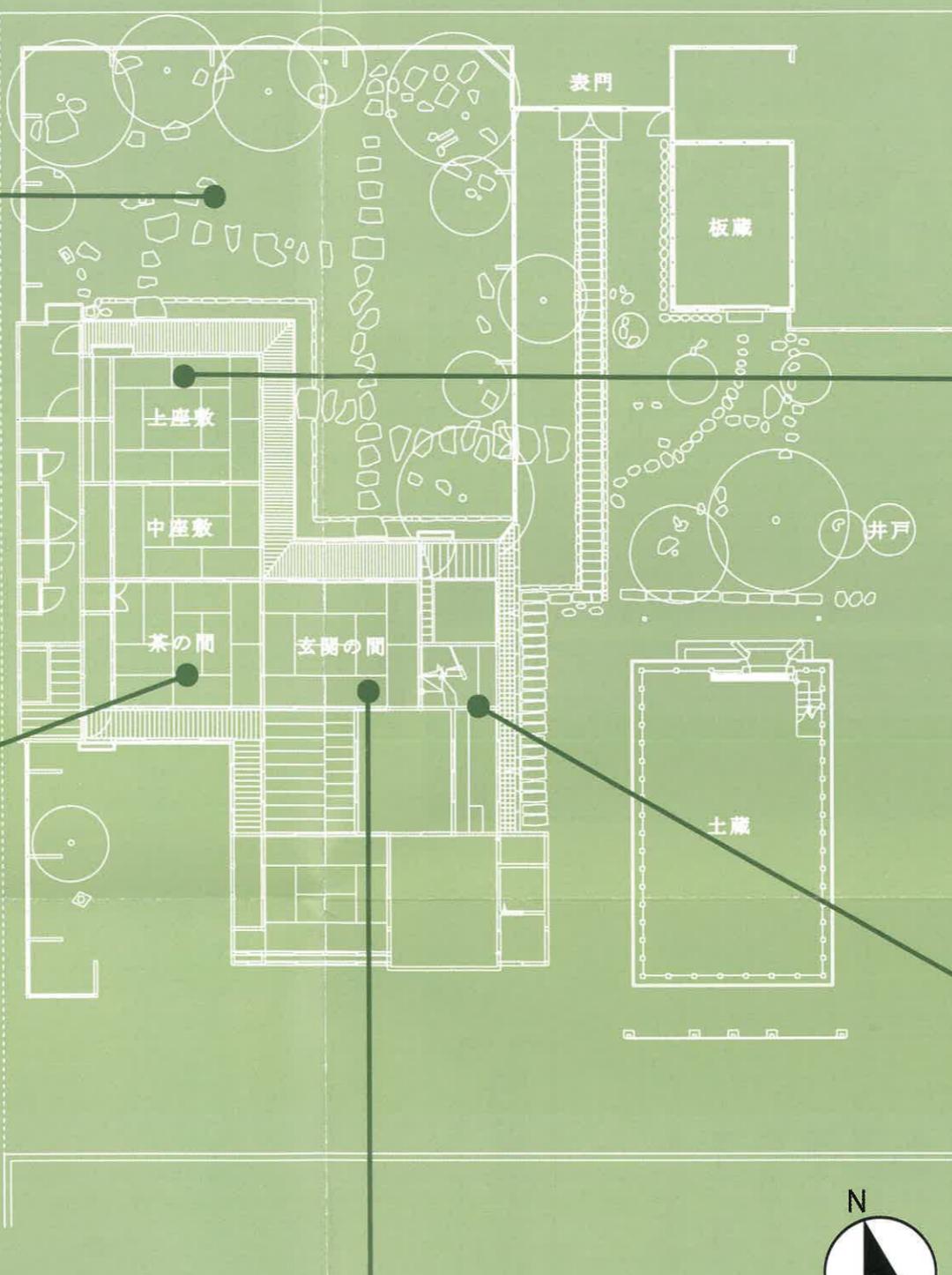
茶の間の室内意匠



一階の格式高い「上座敷」と異なり、二階の座敷は自由自在な室内意匠が特徴です。真ん中が高い舟底天井とし、砂壁には大粒の貝殻片を散らします。曲木を自在に組み合わせた床の間もあわせて、数寄屋造りの遊び心あふれる座敷。江戸時代の伝統から離脱するような、近代和風建築らしい意匠です。

遊興空間の二階

襖絵は、その落款から佐藤耕雲（安政元年～大正9年）が描いたものだとわかります。佐藤耕雲は水沢伊達家臣佐藤左衛門の息子で、この日高小路に住んでいました。この玄関の間の天井も特殊で、矢羽根という凝った意匠で板を張り合わせています。



佐藤耕雲の襖絵

格式高い座敷

庭園に面して、本住宅で最も格式高い部屋が「上座敷」です。天井の回縁が二重で、床の間は良質な杢目のケヤキの板、杉皮付き丸太の床柱、貝殻を混ぜた砂壁で構成されます。中座敷との境界を区切る欄間には、繊細な組子細工がみられます。



モダンな玄関まわり

武士の住まいにみられる式台玄関と異なり、本住宅では近代的な内玄関です。また玄関の土間にはモダンなタイルが敷かれています。このタイルは大正時代に当家が医院として改造された頃のものと推定されます。

